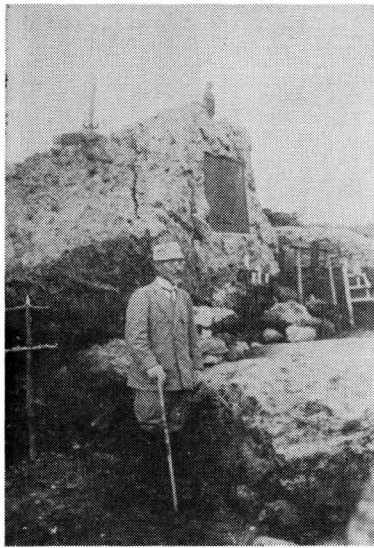




苗場山頂、寿像の傍に立てる大平晟
(昭和10年7月28日除幕式後撮影)

お話をうかがった
りしたい
と考え
ていた
所、
翁の教
え子
の一人
で本年
七十八
歳に
なる金
沢義介
氏ら
のお骨
折
り、去
る六月
末

昭和九年秋、高頭仁兵衛を發起人の筆頭とする「大平晟先生寿像建設趣意書」は次のように述べている。「明治の半、日本の登山史は、旧套の白衣と狩猟との登山期から脱して、新しい学術と美意識との登高時代を展開させました。そしてその扉の鍵鑰を鍛える困難な最初の槌の一撃を下ろした一人は、疑もなく、我が大平先生でありました。」

畏友渡辺真一氏らとの交友を通じて大平晟(一八六五、慶応元)昭和一八、会員番号31、(名誉会員)という登山家を知ることになってから数年が経た。昭和四十七年末、たまたま筆者が大平晟に関する研究の一端を新潟日報紙上に寄稿したこと、大平の門弟の方たちの知遇を得、種々ご教示を賜わることができた。いずれは大平家を訪問して翁の遺品等を親しく拝見したり、

大平晟没後三十年に寄せて

久保田 全



昭和 48 年 (1973 年)
9. 10 月合併号 (No. 339. 340)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

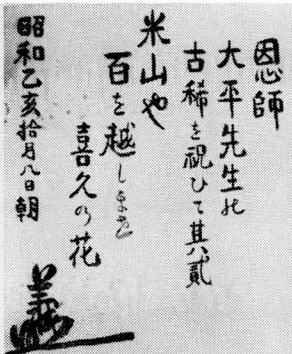
本文	大平晟没後三十年に寄せて	久保田 全	1
	メンヒ登山とチューリップ	成瀬岩雄	2
	ホッフゲビルグス登山学校のこと(つづき)	池沼 慧	4
行事報告	第四回現地支部長会議及び十勝岳小集會について		3
	越後・石川・岐阜支部合同懇親登山		3
会員通信	奥アマゾン探検第一次隊より(1, 2)	山本良三	4
	シリベシ山	岩崎三郎	4
	駒ヶ岳	山下久男	5
	支部の皆様のお便りをお待ちします	鈴木 実	5
	第二次 R C C 南壁隊より	鹿野勝彦	5
図書紹介	山の思想史	辻 莊一	6
	若き日の山	瀬名貞利	6
おしらせ	小島、木暮、岡野三氏生誕百年記念展の準備について	近藤信行	7
	「この一本展」のお願い	図書委員会	7
	第16回もみじ会の御案内	静岡支部	7
	紅葉の蔵王に「きのこ」を喰う会	宮城支部	8
	の御内	宮城支部	8
	ガルツェン遺児援助資金について	他	8
会務報告	図書室		9
	便り		9
	7月理事會		9
	ルム		9
	新入、復活		10
	除籍		11

松方三郎氏逝去

本会名誉会員松方三郎氏はかねて病氣療養中のところ、九月十五日東京慈恵病院で逝去された。享年七十四歳。九月十九日小石川カテドラル教会で告別式が行なわれ多数会員が参列した。
なお十月十五日遺骨は青山墓地に納骨された。本会は深く哀悼の意を表する。

高頭仁兵衛、木暮理太郎、冠松次郎らの諸氏と並んで寄稿数においては最も多い部類に属するだろう。
その自筆原本が二編保存されている。『山岳』創刊号を飾った「妙高紀行」、一年一十号所載の「突貫紀行」(守

大平家訪問が実現した。新潟県三島郡片貝村大字高梨(現小千谷市高梨町)の居宅は、現在お孫さんの大平成氏が継いでおられる。
大平晟が「山岳」に寄せた登山記、紀行文は、一年一十号から二十五年三号まで、「本欄」だけでも二十数編を数える。これは、小島島水、武田久吉、



恩師 大平先生に
古稀を祝ひて其氣
米山や
百を越し
喜久の花
昭和乙亥拾月八日朝

註記があり推敲の跡を残していた。また登山家大平の形成を知る上に不可欠な「自叙伝」の原本がきちんと表装されてあった。
大正三年、大平は片貝高等小学校校長から郷村高梨小学校長へ転任し、翌年高頭仁兵衛をはじめ教え子たちが謝恩会をつくり、「二百坪の園芸地を大平に贈った。大平翁が自らを楽園主人と号して園芸地を愛護したことは有名で

門嶽(登ル記)である。「妙高紀行」は未定稿と銘打っており「蒙家ノ若旦那ヲ止メ身体弱キ人トシテ如何」昨夏高田農学校生数十人暗夜路ヲ失ヒ一大慌事ヲ呈セシト云フ」などと欄外に

ある。その植物目録である「長生花林」「千紅万緑」「千紫万紅」を見た。つづじ、菊、そのほか庭園に植栽した植物が一本一草に至るまで詳しく記録されている。
さらに、あまり岳界にも知られていない、筆者にとっても久しく幻の著作であった大平の処女刊行集、私家版「富士浅間登山紀行」を見出したのは嬉しかった。これは明治三十五年八月、約三週間を費して単身富士、浅間を巡った時の紀文であり近代登山史上からも貴重な文献であろう。
大平は山旅の先々で記念としてその地のスタンピングを押すことを忘れなかったやうで、「山紫水明」「行雲流水」「山岳巡礼記念集印帖」と名づけたスタンブ帖が五冊きちんと保管されていた。晩年の作と思われる鉛筆書きの備忘「我系譜」があり、そこに予が経験山岳として百十六座の山名を列記、更に「大正八年十二月二十日、日本山岳会ヨリ其名誉賞会員ニ推薦サル(参考)同会名誉会員八人ナリ即志賀重昂、白井光太郎、ウエストン、及子」と記されてあった。
翁が生前愛用した登山杖が五本あった。杖の表面には八海山、駒ヶ岳、蓮華山、御岳、阿寒山、大雪山、飯豊山など登山探検記念の彫刻が施されており、ひとときわ翁の山旅がしのばれた。大平の古希を祝って高頭仁兵衛が贈った色紙には「米山や百を越しませ喜久の花 昭和乙亥拾月八日朝 義明」と記されていた。
家族、親族、知友たちへ分けて、一種の変則的形見とする考えで筆を執ったものが「結婚五十年に方て」(昭和13・10)である。この書は翁の教職歴、山岳趣味を知る上からも重要なものである。結尾に「国立公園を批判し我越

後山岳溪谷の価値を論ずる」の一文が収められている。

『山岳』は大平の「台湾の山旅」から成る二十三年三号ほか数冊、JAC「会報」若干、昭和十年前後の写真数遺品はそれ程多くは残されていないようである。

× × ×

これも大平家で拝見したのであるが、昭和十年七月二十八日、信越苗場山頂における大平翁の寿像除幕式に際しての写真をとる参列者は七十六名。大平と並んで立つ高頭仁兵衛の浴衣姿が異彩を放っている。寿像建設会

抱金者名簿があったが、それによると一口一円で高頭仁兵衛の三十口をはじめ、岩波茂雄、中村清太郎、山川黙、辻本満九、木暮理太郎、志村寛氏らの名前があるのも興味深い。

戦後の昭和四十四年秋に至り、苗場山頂の寿像と同型同大のものが、製作

メンヒ登山

チューリッヒより

成瀬 岩雄

登山者のために毎朝四時半にクライネ・シャイデックを四時半に電車がユングフラウ・ヨッホ迄出ると云うので前夜はクライネ・シャイデックのホテルに独り泊った。八月十三日、この日もまた素晴らしい快晴でヨッホの穴ぐらから外に出た時の感激はまた格別であった。漸く未だ上り切らぬ朝日に染まるアレッチホルンやユングフラウ峰の山頂は名だたる大氷河、アレッチ氷河を距て、静まり返った中に、さすがはアルプスの盟主と思わす偉容だ。登路はオーベル、メンヒ、ヨッホから左に尾根通し頂上に向うので、既に十数名の登山者はヨッホ目掛けて一足先に行

者羽下修三氏から小千谷市民館を通して遺族大平氏に贈られ、これを譲り受けた教え子たちの手によって、翌四十五年十一月三日大平最念碑除幕式が楽天国で行なわれた。以来、建碑の発起人一同は毎年十一月三日、碑前にて大平翁をしのび法要を営んでいる由である。大平の教え子たちはいずれも還暦、古希を迎える年代であるが、美しい師弟愛、深い恩愛のきずなは厳として存在していたのである。

× × ×

大平最念碑後三十年、も隆々発展の途をたどりつつあることは慶賀に耐えない。旺盛な山行と著作によって登山文化を開拓し、近代登山への礎石を置いて先駆者の一人大平最翁をしのびあえて一文を草した次第である。

(四八・八・五)

くについて歩き出した。雪原の雪も早朝のため固く歩き易く、一時間ばかりでメンヒの尾根に続く鞍部、即ちオーベル、メンヒ、ヨッホに到着した。此処まで来て未だ雪原一面に陽はあたらず、グロース・シュレックホルン、フィンステラルン、ホルンの頂上が漸く朝日に輝くのが素晴らしい。

未だアイゼンをつけるのも早い……とひとすらす尾根を登りにかかった。尾根の登りでは或いは岩、或いは雪、つまり岩稜と雪稜の連続であるが岩は幸い、素晴らしく固く、岩を巻く様な箇所が何回もあったが何れもグラク様な岩もなく安心して掴めるので楽だ。迷

お詫び

会報の発行が遅れ、会員の皆さまに大変ごめいわく、ご心配をおかけしてまことに申しわけございません。

会報の重要性については、いまさら申すまでもありませんが、いろいろな事情により発行が二カ月も伸びてしまいました。取りあえず今回は九、十月号合併号として発行いたしました。十一月号より軌道に乗せて発行いたしますのでご了承下さい。

り先も幾回も岩稜を巻く処もあるのですが、アイゼンをつけての岩場は万全の注意と緊張であった。最近のアイゼンは素晴らしく軽いので足の運びは楽だがそれだけに足場では岩の凸部につまりず危険があり、緊張せざるを得ない。小生の計算では普通ユックリ行っても頂上迄四時間では行けると聞いていたのだが、胃のない自分は六時間では行くと内心計算して登って行くのであった。何んと言っても四千米の山は初めてだし頂上近くの最後の稜線を度々仰ぎ見ながら溜息をつくことしばし、もう早い組は降りて来る連中もある。イ

タリヤから来たと言ふ婦人を交えた四人のリーダー格の人物からは「富士山とどっちが難しい……」等とひやかす。独りかというから、そうだということと大体独りなど来るのが危険なのだ……誰かとロープ等というので、それならそこのロープ仲間に入れろといったノロープ等といいながらもう降りる急いで行く。事実、ロープもあれば楽には違いないがなくても行ける、というてスタスタ駆け降りるなんていう事は出来ない岩稜と雪稜の入り交った登路と思えば間違ない。

何んといってもアルプスの四千米級の山だ。十二時近く漸く尾根を登りつめて左折し頂上へのヤセ尾根に辿りついた。これから頂上迄が凄くヤセ尾根で、実は此処でパンを喰りながら考えてしまった。幅一米もない雪稜で両側は凄く急峻だし、既に高度もウェッターホルンを遙かに越す四千米迄登って来たのだから無理もせず引返そうかしらば考えたのだが併し頂上は指呼の間。二十分も歩けば到達出来そうだ。漸く勇を鼓して進む事にした。

登り出して見れば既に今朝から登り出した十数人の足跡が判然踏み込まれてあり、この跡さえ外さなければ案外楽な事と判ったので最後の頑張りとしても緊張一杯に登り続け、幸い、二十分位で山頂を踏む事ができ、この感激はまた、何んともまたえ様のないものだ。その昔の横さのメンヒからアイガーへの縦走という写真が眼にちらつく。凄くナイフ、リッチだ。グロース、シュレック、ホルンの頂上のウーベル、アイメアに落ちる幾筋かの狭いクロアールは凄く。辻村さんや近藤さんを呑んだのはあの辺りか……等としばし先輩連の事など思ひ浮べながら休憩。何んといっても小生にとっては初めての四千米なのだから胸の高鳴りは抑え難い。考えて見れば約七時間

もかかって登った事になるのだがこれも独りでユックリ、この快晴にアルプスの巨峰の眺めに励まされたからこそ登れたのだ。とにかく、嬉しかった。

最後にもう一度、横さんのアイガーに、辻村、近藤両氏のシュレックホルンに別離の挨拶を送り、降りにかかったの一時を回っていか。その昔、そもそもアルプス、否山に取りつかれた若かりし頃のこの三先輩の名著「スイス日記」「山行」が眼にちらつく……。それでも降りれば岩場だけは特に上衣のフリクションを利用して慎重に巻き、雪稜の箇所はグリースで飛び越して三時間足らずでヨッホに帰り着く事が出来た。日の長いこの地方では未だヨッホを取巻く巨峰の頂上はアルペン、ローゼには達せず、青空の元に輝やかしい。アレッチホルンの白一色の素晴らしい山容が特に注意を引く。

メンヒにも登れたし、グリンデルワルドの期待外れの難路には永逗留する気もないので翌日はかねてから連絡しておいたアノルド、ランをミューレンに訪ねたが生憎手紙の入れ遅いで会えず、チューリッヒに遅れて届いた小生を待つというランの手紙で、遂に会談の機を逸したのは残念で、ランのミューレンのシャレーはアイガーからスバルテンホルンを一望の中に眺められる岡の中腹にあり、あんな処でユックリ話でも出来たら……と残念であった。ミューレンはスキーなどでよくその名を聞いていたのだが、余程賑やかな観光地だとはかり想像していたのが全くさにあらず。六甲山やダージリンの様な感じの処で、自動車を入れないので全く閑静な別荘地みたないで、その上景観も広く、チンゲルホルンやスバルテンホルンが右に、目前はユングフラウからアイガーにかけての大白壁と来ているから、グリンデルワルド等より遙かに景観の展開が広く、それ

に人も少なく、小生にとっては全く予想外の静かな別天地であった。

チューリッヒでは旧知のグラーさんが待っている。その翌日早速ルッツェルン経由で出かけた。チューリッヒ湖を遊覧船で約四十分。キスナハトのグラーさんの岡の上の邸宅に招かれてユックリ夕食を味わい、御自慢の日本から取寄せている大根畑、桐の木、等を観賞した。池には時期は過ぎたが芭蕉の枯葉を見た、その傍にはこれも日本から持帰られた石燈籠等を見て久振りで落付いた一晩を送り、いい気持ちであった。チューリッヒの駅近くのホテルに帰るため最後の遊覧船、八時に危く間に合い、また翌日の再会を約してお別れした。当方から持参の水芭蕉の蠟けつ眼鏡ケース、大和美術館の六曲の松浦屏風の小型のもの、会津木彫りの盆などの御土産にグラーさん夫妻の御満悦そうな顔は忘れられない。

翌日は誠に恐縮した……というのは先年グラーさんがスイス山岳会員五名を携えて来日された節、山岳会で十数名集まって一夕、歓迎会を催した事を覚えて居られたのだから……。遠く十五世紀から続いているという古風な、格式豊かな料亭に昼食に招かれ、先年こちらで招いた五名の内の三名(二名は他界の由)の御連中も一足先にここで我々を待ち受けて居られ、つまり、先年の御返しに招待という歓迎であったのだ。当時こちらで出席者一同が記念撮影した写真、会報に掲げた小生の歓迎文、まで携えて来られたのは全く驚いてしまったのである。この写真を逸早く小生に見せて皆さん未だ元気が……、横さんは元気が……等と矢継ぎの質問に始まったこの歓迎会には小生も感激、下手な英語で一応の挨拶を述べなければならなかった次第である。それにもっと驚いた事には

……小生が昔、一九二六年、吾妻山から招尻へ正月の元日にグラーさんと初めて会ってスキー行を共にした時の写真をグラーさんが持ってきた。その当時のグラーさんの日記に小生等の三人一行の、SEIKI Higher Schoolと書いた手帳、日記を見せられたのは全く驚きと感謝の他はなかった。

山が結んだ海外の友。こんなごやかな、しかも先年の御返しに御礼という一応、公式の歓迎には、内心頭がさがらざるを得なかったのである。場所もとにかく、何百年の歴史に輝く、チューリッヒ一流の料亭らしい、われわれ素人眼に見ても判る古色豊かな料亭であったには全く恐縮した次第であ

第四回現地支部長会議と

十勝岳小集会

伊藤北海道支部長を中心に準備がすすめられた十勝岳小集会の受付が、六月十五日、折しも北海道神宮祭のさなかに、札幌市の中心部にある北大植物園で九時から始められた。快晴のもと、りくぞくと全国各地から集って正午にはかなりの賑いを呈する。二台のバスに分乗し、次の集合場所旭川に向う。車窓からの暑寒別岳連峰はいまだ白銀をまとい北の山の魅惑をそそる。旭川からは既に大雪山旭岳でスキーを楽しんで来られた一行が加わって、賑やかな自慢話がはずむ。西日に照らされた旭岳からトムラウシ、オプタシテ、更に目的の十勝岳の山なみが一望に収められる。

十勝岳望岳台で帯広、富良野から準備のため先行していた方々が加わって開会式が行なわれる。今西会長、伊藤支部長、奥田実行副委員長の挨拶の後、自己紹介が行なわれ記念写真に収

る。集まったグラーさん他三人の御連中も話して見れば何れも相当に山を歩いている御連中ではない。数日前に山から帰ったばかりの日焼けの顔……こんな会には小生にとっては今度のスイス行の最後の日を飾るに全く感激、一生忘れられない一日であった。(一九七三・八・二十一)

(注) 本稿中に登山の先覚者辻村伊助とその名著「スウイス日記」の追憶の場面がありますが、辻村伊助は今からちょうど五十年前の大正十二年九月一日、関東大震災の災に遇われ小田原の湯元で死亡。本月は辻村氏の五十年忌に当たります。

まる。更にバスで宿舎白銀荘、勝岳荘に向う頃は夕暮も迫っていた。凌雲閣の支部長会議は、笠原(岩手)伊達(宮城)藤島(越後)伊藤(北海道)の各支部長、本部からは今西会長、伊倉・松丸・板倉各理事、佐藤テール常任評議員が出席、伊倉理事の報告があり、松丸理事の山日記について八時すぎ懇親会に合流するため白銀荘に急いだ。

大きな焚火をかき、銘酒大雪山をかわしながら、地元参加者手づくりの野外料理、羊肉焼、鮭鍋、山菜のオデコ、アスパラ、アイヌネギ、馬鈴薯などをつつき、各地区代表によるなど自慢が始まる。野営火は高々と、人の輪は広がり、前十勝の肩には、こうこうと月が昇り明日の天気を約束している。

十六日七時出発、近く取りこわされ

る運命にある白銀荘とも別れを告げる。富良野川を渡り泥流地帯を登る。四班に分れた一行は延々と続いている。昭和三十三年の十勝岳大爆発で潰滅した硫黄採掘のリフトの残骸を横目に急な瓦礫を登る。処々に奥田氏持参のJACC会名入りのベグを埋め、ケルンを積み、暑さをさへぎるかのごとく時折り雲が覆ってくる。新噴火口からの噴煙をさけ美瑛岳側に回り込んで登るが、完全にさけられず噴煙で咳き込む。広々とした火口丘を横ぎり、雪溪を登りきると最後の突峰の登りである。長老の先輩諸氏はベースを崩さずにお元気で登っておられる。

十二時二〇分に全員が登り終え、會長の音頭で万歳三唱、女子会員の手で野点が行われ、湯茶がまわされる。次の目的地上ホロカトメック山縦走に出立したのは十二時四〇分、先刻の火山瓦礫地帯を登るのとはうってかわって歩きやすい高山植物帯である。その道の権威者が多きさまざまな高山植物の名が出る。キバナシタナゲ、コメバツガホクラが多く開花していた。左に下ホロカトメック山への連山を、右に旧噴火口(安政火口)を眼下に隊列は上ホロカトメック山を越し、十勝岳温泉への分岐点に達する。時間は充分あり大休止が続く。眼前の富良野岳の雄姿には、さぞかし次に訪れる機会を望んでやまなかったことであろう。

(野口、村尾の両先輩は翌日四時半起床、元気に富良野登山を先行された。)

そそり立った大砲岩やハッチ岩を眺めながら下山を始める。旧噴火口からは幾筋もの噴煙が音を立ててなびいている。長い雪溪を滑り降り、途中で雪解の登路を伝って火口に出て、重い足を引つながら十勝岳温泉に向う、四時四〇分全員無事下山を終え、凌雲閣前で待ち受けていたバスに乗り、国民宿舎上ホロカトメック山に送られる。温泉で疲れ

をいやし、大広間で交歓会が開かれ、遅くまで歓談が続く。十七日朝食後、閉会式と反省会が行なわれる。道外から参加された多くの方々は、次の目的地知床半島、利尻岳、大雪山などに向われたが、同日正午過ぎに突如として襲った根室沖地震で、列車など遅れたので、さぞかし日程をきりつめた大変な登山であつたろうと推察いたします。

(北海道支部 高沢光雄)

参加者(順不同)

塩田良伸、天野光明、鈴木三郎、長谷川良彦、川北仁、山村正光、島中六左衛門、林稔、菅原定、北島光子、岡部みち子、斎藤桂、萩谷三枝子、柳田涼子、藤島玄、斎藤平七、佐藤一栄、井口正男、笠原潤二、中河与一、阪本福史、網蔵忠昭、平野明、今西錦司、安藤久男、高沢光雄、伊藤秀五郎、成瀬岩雄、牧野衛、奥田五郎、山形不二男、吉村健児、小杉伸一、松丸秀夫、村尾金二、野口末延、広羽清、森川洋佑、沼倉寛二、板倉建正、伊倉剛三、佐藤兼二、福田文二、勝石八重、渡辺弥生、外山文子、薄井照子、伊達篤郎、庄司駒男、高橋功、遠藤昭治、飯野信、政嘉秀一、千田早苗、蓬田時男、高橋憲二、佐々木豊喜、佐藤進、伊藤信夫、岩崎三郎、村上肇、大塚達男、大山幸太郎、佐藤静夫、根岸祥一、泉亮、古屋元巳、斎藤精一、渡辺正臣、渡部盛夫、小番直義、植村清一、佐藤拓夫、山川力、石井忠雄、浅利欣吉、新妻徹、原田幹子、松本熊次郎、安田成男、矢沢義弘、渡辺嘉男、松本慎太郎、佐藤テール、増田なおみ、日置恵子、小松京子、半沢美枝子、小沢悦子、萩千夏子、佐藤英子、北林嘉鶴子、福田光子、小沢裕子、伊藤寿雄

会費をお納め下さい。

越後・石川・岐阜支部 合同懇親登山

上記三支部は、梅雨前の六月九日から十二日の四日間、今西錦司会長（兼岐阜支部長）を囲み、加賀白山に大合同懇親登山を行った。幸い好天に恵まれ、楽しい山行となった。岐阜支部では、今後他支部との交流と懇親を目的にこのような試みを続けたいと考えているので、いささか旧聞に属することとなるが、その模様を御報告し、皆様の御賛同を得たいと考える次第である。

参加者は次のとおりである。
リーダー 今西錦司（岐阜支部長）
サブ・リーダー 高木崎男（岐阜支部）メンバー

越後支部 藤島 玄ほか十四名
石川支部 亀田与三ほか 四名

岐阜支部 高木泰夫ほか三十名
登山は、山行深夜大垣における歓迎会に始った。開会当初、越後支部の面々は、「フズマ・スプチュウ」の御到着が遅れたこともあり、至極神妙に席に納まつておられたが、宴たけなわになるや、越後美人御一同の佐渡おきさを皮切りに、市村貞夫流会津磐梯踊り、鈴木敏雄楽団を率いた五十嵐篤雄氏の網渡り、平田大六通訳によるカトマンズの副會長リユー・キチの出現という多芸振りで岐阜勢は完全に圧倒され、高木崎男氏のガマの油でも非勢挽回はならなかった。

六月十日は午前四時大垣出発、大白山川ダムから大倉尾根道、カンクラ雪溪のルート。折柄、梅雨の合間の快晴の晴天で、新緑のぶなの原生林の中、トチ、ミズキ、ウツギの花の真盛り。各自欣喜雀躍して山路を辿った。加えて越後支部諸賢の御用意は、日本酒原酒、ウキスキー、ビール、梅酒をはじめ、笹餅、イワナの干物、ミツ豆、トマト、

リンゴと果てもなく、これをねらつてくついで歩くものも現れる始末であった。

かくして十八才から七二才までの全員が室室へ到着、石川支部津田文氏御一行の心暖まる歓迎を受けた。休む間もなく御前峰に向い、白山神社奥の院に参拝し、三角点に立つ。霧が上がつて眺望はままならぬが、越後の大半の方々は始めての白山頂上である。今西先生は二度目だそうで、前回はいつでしかたかお尋ねしたところ、「一九二五年、西堀と一緒や。引き算をしてみるとなんと四十年前ではないか」と、頂上では早速藤島、今西両支部長を真中にバンザイとカンバイ、記念撮影。長い影をひきつって室室へ下

ホッフゲビルグス登山学校のこと

——日本の登山クラブを思う——

〔前号から続く〕

最終日の卒業パーティーは入学式の時と同じようなスタイルだがお互願なじみになったせいにかドンチャン騒ぎも、やかん、鍋、食器等を打楽器にしてパーティーは一層激しくなつてゆく。私の横に坐つたオランダ人は日本の登山学校には是非行つてみたいから紹介してほしいと云う。日本には登山学校が無く小規模な登山クラブが数多く存在する事を辛うじて説明できた。オランダ人は日本は無料で登山を教わる事が出来てうらやましいなど云つていた。しかし私はもし、彼が日本の登山クラブの実態を知つた後ままだうらやましがるだろうかと思ひながらいまいにうなずいた。たしかに無料が登山を教わる事は出来るかもしれないが、この学校で学んだ登山技術を身に付けるには日本の登山クラブでは何年かかるだろうか。初心者にはクラブ山行や合

る。当夜は無論入山祝いで、伊藤ボツカ隊長、大槻料理隊長らによるスキヤキで大いに飲み、寒さが増すのを感じながら眠りついた。

明けて十一日、冬のような寒風の中を大汝峯へ。更に欲張る者は「いちましくも、コブのような」——以上今西先生の言、不悪——四塚山の三角点をも踏んで、天上の楽園小椋平から楽々新道の長大な下りにかかった。天候は幸いにも冬の寒さから春の陽気へ、最後には夏の暑さという晴天で、「全く悪運の強い人（含今西先生）ばかりである。下山祝は岩間温泉。酒宴は深更に及び、誠に盛会裡に合同登山は幕とじた。

（藤井洋）

池沼慧

宿に於いて自分の登山技術を身に付けると言うが果して本当に自分が技術を取得する時間はどれだけあるだろうか。日本でこの様に自由に初心者登山を楽しめるだろうか。パーティーは私のこだわりとは関わり無くなりますが賑やかに熱気を帯び夜が更けてゆく。翌朝下山。学校長モラベック氏と握手を交し、別れを惜しむ。校長より支部の皆様によるしくとの伝言。

オーストリア登山学校卒業後、フランスのシャモニーをベースとして、八月七日エグニード・シャルドネ（*Ag. du chardonne*）三八二四mのクロアールの登攀。傾斜度四五度〜五五度、ルート高度差一〇〇〇m。八月十一日エグニード・ベルト（*Aiguille de Vert*）北壁・四二二四m、アルゼンティエールヒュッテ出発二時三〇分、

取付は十二日三時四〇分、頂上へのリッジ一三時悪天のためリッジ基部でビーク。十三日モンタンベルへ下山しグリーンデルワルトで帰国の準備に取りかかった。

会 員 通 信

奥アマゾン探検第一次隊より

その後お変わりございませんか。ベルにまいりましたから二週間やと慣れてきました。ここ一週間ほどの間 *lucios, pucolpa* でジャングル情報集めをやってきました。予想以上にペルー国内のアマゾン人は入っているようです。しかし、まだまだ未開のインディオの住む山地も数多く適確な情報入手とは行きませんが、時間をかけて調べるつもりであります。

目下、通関のためにリマに待機中です。荷物が取れば陸路クスコ・アタラヤへ行き、そこからマドレ・デ・ディオス河の下降を開始する予定です。会務もそこそこにアマゾンにやってきました。会の方々に申訳なく思っております。

今回の奥アマゾン計画の中心はやはりコロンビア、エクアドル、ヴェネズエラあたりになるものと思われ、それらの国々へ精力をつぎ込みたいと考えております。情報を提供してくれる人達は、毛皮商人、木材商人、教会関係の人々、軍部、文部省、警察官なども多く、中には石油資源開発関係の人々もいます。アマゾンには知られざる大地の様に思われていますが、すでにこちらでは生活の場となっており、今後、開発は急テンポに進むと考えられます。会の皆さまよろしく。

六月二十三日、リマにて

（山本良三 近藤信行宛）

アマゾンから暑中お見舞い申し上げます。古代インカの首都クスコから旧

アマゾンへ下り、アタリヤからここPTO・マルドナルドまで六〇〇キロを無事下降しました。途中、ワニ狩りや大ナマズ釣りなど、たのしい川下りでした。会の皆さまよろしく。

（山本良三）
七月二十六日受信（近藤信行宛）

シリベシ山

十勝岳現地小集会の帰途、札幌から列車でシリベシ山に向ったが、根室沖地震のため遅くに比羅夫駅に着いた。駅で宿を尋ね、駅前の伊達さんの家を教えてくれる。無理に頼んでやっと泊めていただく。

翌朝、伊達さんの車で登山口の駐車場まで送っていただく。身仕度を整え六時三十分歩き出す。一定ごとに頭の上までヤブ蚊がまよいあがる。タオロを頭からかぶるがとてもおっつかない。とにかく歩き間があれば、チクリとやられるのはたまにはいい。

二合目付近まで来るとヤブ蚊の攻撃はどうやらおさまりホッとする。三合目で小憩。正面のニセコアンヌプリはまだ高い。五合目、六合目と、半のある山は私にとってこれが初めてである。はげみになるかわりに、やれやれまだかと気にもなる。

七合目付近で上を見ると太陽に輪がかり、ニセコの右肩あたりに黒い雲が出ては消えている。快晴も今日限りらしい。アルプスだと半日ものたないだろうが、ここではどうなるものだろうか。八合目付近でシラネアオイを見つけて。一面に咲いている。紫色が少し濃いようだがエンレイソウも咲いている。夢中でシャッターを切る。そういえば十勝岳のときもびりの方で写真を撮しながら上ホロカメトク山に着いた。それでも何んとか九合目にたどり着く。

小屋への路を右に分け、左に残雪を

横切り山頂に立つ。三角点のそばに座りボヤリとニセコ方面の山を眺める。地図を掲げ、あれがチセスプリ、これがイワオスプリと一人で楽しむ。

お鉢めぐりでもやろうかと二時一〇分に立ちあがる。右は大きな指鉢状になっている。左は深く落ち込み、路のすぐそばまで崩れて、やがて路も無くなりそうである。黄色い花が一面に咲いている。キンバイらしいが、ミヤマキンバイであろうと一人で決め込む。京極コースの分岐点があり、ここ路の様子が変わり、岩が多く火山特有のヤスリのような岩を登ったり降りたりする。一番高そうな岩に登って憩う。尻別岳、その先が洞爺湖と素晴らしい展望が広がる。

白い小さな花が咲いているが名はわからない。砂礫帯をたどるとお鉢めぐりもやがて終りに近づく。左下に小屋が見える。残雪を下り小屋に入る。小屋の管理人にお茶をいただきさぐ下山にかかる。九合目あたりの残雪で小休。岩内方面はすでに雲の下になっている。雲足も早くなり、まっすぐこちらに飛んでくる。ちいさなつむじ風が音を立てて通りすぎる。去りがたう気が付かなかったが、丹沢あたりを歩いているような気がする。五合目付近で見たニセコアンスプリには雲がまっわりついて、いま登ったばかりの山頂はすでに雲に覆われている。

あれほど悩まされたヤブ蚊も、この時間になるとすっかり静まり、無事に登山口にたどり着く。半月湖に遊び、帰途、再び伊達さんの車にお世話になり、比羅夫に一七時三〇分に着く。発車まぎわまで伊達さん宅で休ませていただき、俱知安行きの列車に乗る。今にも降りだしそうな雨模様のなかに、大きなシリベシ山が立ちはだかり、これで北海道の山とも別れると思うと、

伊達さんの親切と共にふと目頭が熱くなる。

駒ヶ岳

(岩崎三郎)

私たちは山の会と称する会を結んでいる。毎年一回懇親の集いを催している。今年の会場は函館の郊外大沼湖畔であった。会員とその好伴侶十五名が集まった。その機会に四名の有志で、その近くの駒ヶ岳(一、四〇〇m)に登ることになった。湖畔の登山をスタートしたのは九時半、カラマツ、エゾマツのゆるいスロープの小径をのぼる。一時間もゆくと檜や樺の雑木林で、若葉の匂いがたちこめて、これに酔うばかりである。やがてエゾウツギの紅い花房が重そうに垂れ、あるものは地にとどいている。白い繭の様な花も微風にゆらゆらしている。外山夫人にきくと白珠という名のだと答えられた。

エゾが島 ウツギの花の紅の群

もう低い灌木の地帯。頂上もすぐそこである。十二時半。津軽海峡はもやに包まれてかすんでいて、北東の内海灣の海は青かった。山麓の大沼三湖はまるで碧玉の様だ。ここへは世の雑音は何一つとどかない。私は六十九才にして、この山のここに立ち得たことを幸いに思った。そしてこれが、北海道に於ける最初の登高となった。よしその山の高さは千余mにすぎないけれども。私たちは微風に吹かれながらこの山を大沼湖畔へと下った。更に銚子口駅へと湖畔の路を学生時代さながらの歩調で辿った。

その夜、本会員でもある外山定男君は、函館山(三三五m)からの夜景を私に是非見てもらいたいというのでそこへ案内してくれた。何でもここからの夜景は香港、ナポリと共に世界三大夜景の一つという。なるほどこれを見てさあと思ひを感じた。かくて函館から帰宅したのは十二日の午後九時。

葉師義美氏から同氏編の「ヒマラヤ関係目録(九山房蔵書)」と、深田志げ子さんからは「紺暖簾」がついていた。それには故久弥さんの詩が染め抜かれていた。

緑の山を幾つも
幾つも越えてきた。
不意に山が切れて
海があった。

青い海があった。
海は白い波を立て
陸には桐の花が
咲いていた。

一九六四年六月
平井賀にて 深田久弥
というのである。(山下久男)

支部の皆様のお便りを 御待ちします

山を歩いて三十年当年五十才に成ります。縁有て昨年入会させて頂いたものです。

学生の頃から山がすきで現在も毎月一回は山歩きをしています。

毎月配送される会報も楽しく拝読しています。特に春田さんの蝶のお話など興味深く読みました。

地方に支部を沢山持つ当会の事ゆえに、地方に支部の会員の皆様とお会出来るし現地にくわしい支部の皆様のお案内で山歩きも出来るものと楽しみにしています。

処が会報には地方支部の記事が誠に少なく淋しい残念に思っています。もっとも、と地方支部の様子を会報にお寄せ下さる様に御願います。

狭い日本ですがまだまだ登った事のない山、見た事のない谷、行った事のない高原も沢山有るし珍らしい地方行事やお祭等も有ると存じます。是非会報を通じて全国の会員に御知らせ下さい。また小集会なども有る事ゆえ時間とお便のゆるす限り参加もし度いと思

います。また会報の編集に当る係の皆様にもこの点をどうぞ宜敷く御願います。

支部会員の皆様御便りを御待ちします。(鈴木実)

エベレスト南壁隊より

第一信

前略 ござた致しておりますが、お元気のことと拝察いたします。今年のモンスーンは本隊では比較的好天のようで、毎日激しい夕立はありますが、青空がのぞめることも多く、過ごしやすいつ天候です。例年ならこの季節には飛ばないカトマンズ、ルクラ間も、散発的なフライトがあります。私達RCCエベレスト隊も七月二十日カトマンズにほぼ全員が集結、いよいよ本格的な行動に移りつつあります。すでに七月十日には第一次輸送隊、二十一日には第二次輸送隊がカトマンズをたち、本隊も四隊にわかれて、七月二十七日の第一隊を皮切りに、三日おきでカトマンズをスタートの予定。このようなモンスーン最中のキャラバンは幾分異例かも知れませんが、十月中には登頂という計画から逆算して、多少の不利は承知の上で、あえて組んだスケジュールというわけです。JAC隊からの参加は結局住吉さんと私だけということになり、期待していた植村さんとかカトマンズの再会が駄目になったのは残念ですが、こししばらくのローワリン、クンブでの生活のおかげで、順化だけは順調にしておりますので、精々ががんばりたいと思います。成否はともかく、JAC隊と同じような反省をしなくてはないうであります。

私も第四隊を送り出したあと、八月十日ごろまでにはルクラへ上り、BC設営の準備をはじめます。それではまた、皆様によりしくお伝え下さい。(鹿野勝彦)

同

第二信

皆様お変わりなくお元気でお過ごしのことと存じます。私達もその後順調に計画をすすめております。

本隊は七月二十七日から八月五日にかけて、予定通り四隊に岐れてカトマンズを出発しました。モンスーン最中のキャラバンだけに、いくぶん、雨とヒルとに悩まされましたが、各隊とも元気で日程を消化、第四隊を除き、すでにナムチェバザール上のホテル、エベレスト・ピークに集結しました。標高三八〇〇mのここでは、いまエーデル・ワイスをはじめとする高山植物が咲き乱れ、放牧されたヤク牛がそのお花畑の中をガラガラ鈴をひびかせながら歩きまわっております。流石にまだ日中は朝に包まれている時間が多いのですが、霧など雲の切間に望めるローツェやアマ・ダプラムの岩壁は、ブレ、モンスーンには見られぬ新雪を一面にまとった姿で、しみじみヒマラヤに在ることの幸を感じさせてくれます。隊員はここから約十時間の予定で高度馴化を行ないながらBCへ入ります。これに先立ち、先発隊員中心の輸送隊はBCへの荷上げをほぼ終えました。BC集結は八月二十五日の予定です。天候が許せばただちにアイスフオーリングのルート作業を開始したいと考えています。

今年の年次晩餐会

12月1日(土) 6時、ホテル・ニュージャパンと決まりました。会費は三五〇〇円の予定です。

図書紹介



山の思想史

三田博雄著

考えるよりもさきにまず行動するのは大猫牛馬のすることであり、人間のすることではない。それなのにちがいの若い登山者は、私のひがめかも知れないが、山というものを行動の対象としてのみ捉えて、山が自分の心にととのえ関係を持っているかとか、なぜ自分はこんなに山に登りたがるのかなどの問題は全く眼中においていないように見える。そこに山があるから登るのだというあつち引き合いに出されることばは、そのうちに豊富、複雑、深遠な思想があったはずである。それを顧慮しないで、山に立ちむかうのは、私の考えからすれば、片手落ちである。

このように考えている矢先に三田博雄の「山の思想史」(岩波新書)が出版されたのは嬉しいことである。また著者が私とひとまわりちがいであるが、明治生れで、ゲーテやワーズワスに親んでいることも、十九世紀うまれの私にとっては、ものをいいやすい人であるように思われる。そのようなことで何となくこの本について書いて見たくなった。

この本は九人の登山者と山に何らかの意味で精神的にむすびつきのある人物を年代順にとりあげて、これらの人たちが山をいかに考えていたかを評論

している。「山の思想史」の題にふさわしい。ところでこの人選について、私としてはいくらかの不満がないではない。古いところでは大町桂月、新らしいところでは深田久弥、それから小島島水などがとりあげられていない。さらに著者によってえらび出された登山や文芸のスターばかりでなく、一般民衆の登山の思想を発掘してもらいたかった。これは困難な課題であることは百も承知のうえで、博學で文献の渉獵に非凡な手腕とヘルメノイティクスの才能に恵まれたという著者に期待するところである。著者は数学や科学の歴史の研究者であつて、歴史家であるという点で、私も著者の足元にも及ばないが音楽の歴史の研究に従事しているものであるから、このような注文をしたくなる。音楽史では大音楽家の業績をとらえて、その記述解釈にのみ心を奪われていた時期は、ある意味で過去のものとなった。それよりもこのようなスターをそだてた時代、スターをどのように受け入れたかを重く見る傾向、すなわち音楽の社会的背景に注目する学風が台頭して来た。私はこのような研究こそが、ほんとうの音楽の歴史だと思っている。それから、山についての歴史叙述についても、これを要求してやまない。この著者ならば、この困難な課題を美事になしとげることができることを確信する。

私はこの本を現在さかんに山に登りつつある青年たちに読むようにすすめたいことは山々だけれど、ちょっとためらがある。というのは今の若い人はゲーテやワーズワスよりも、十九世紀から二十世紀にかけての文芸家、思想家、評論家に親しんでいるので、いきなりゲーテの「ヴィルヘルム・マイスター」をつけれ、ワーズワスの長い詩にぶつかると迷惑するだろうと思うので、著者の渉獵に多大の敬意を表

するが、これらの渉獵の成果についての解説をつまびらかにしたほうがこの本を、より教育的にするのに好都合ではなかったかと思う。しかし岩波新書としての紙幅の制限もあることだし、著者が心から親んでいる文芸上の古典がひきあいに出版されたのは自然の帰結であつて、この本のきずというものはできない。

(辻 莊一)

昭和四十八年六月

岩波新書(青版)二六六頁

岩波書店 一八〇円

若き日の山

串田孫一著

串田氏の書かれた詩や随筆は雑誌「アルプ」などでよく読みその詩人らしい文章にはいつも若々しい感情が溢れて居るので今度出版された「若き日の山」の書評を編集局から依頼されたとき気軽に引受けてしまった。然し実際にこの本を見てこれは大変難しい仕事を引受けてしまったと後悔した。同氏は哲学者であり又詩人であるから文には哲学的冥想と詩人的直感がよく表われて強い印象を受けるがそれだけに批評を書くのは難しい。氏は高校生から大学時代に本格的に山と取組みロッキングクライミングに重点を置いたもので私とは大変経験が違ふ。この本でも青少年時代の山に対する情熱がよく表われて又山や高原で観察した生物や雲に対する氏の独特の鋭い観察力で唱い上げる詩情が随所に光って居る。氏は又画をかかれいとも絵の道具を携行して十分山を楽んで居られる。この本で先ず「若き日の山」の章を開いて見よう。表題の通り少年時代から青年期の登山の経験が語られて居るが必ずしもその時期に限った訳ではない。最初の「馴鹿の家」は中学生の時に迫った山小屋の思出でこの頃から山の雰囲気魅せられたらしい。風の作るレンズ雲の変

化の美しさを語る「風の伯爵夫人」や山湖を囲む山々が朝の静寂の湖水に倒影する姿をフランドールを踊って居ると幻想する「山の輪舞」などは、如何にも若い頃の感情がよく表われていて面白い。これらも美しい散文詩だて詩篇「水の岩峰」や「山頂」は素直な言葉で気取らずに唱って居るので私も共鳴できる。「太陽と春と泉」では画家セガンティニの紹介で、多くの若人に愛読されることだろう。「冬・春・夏・秋の手帖」はいずれも短詩である。「山の雲の日記」は東北の山から北アルプス又近くは大菩薩峠や石老山等十二ヶ所の印象を語って居る。「薔薇の花びら」は親しい岳友の好きな音楽とその人の戦死の為の葬式の際その音楽を使つて宗教と無縁だが友情濃かな式典を行つた非常に美しい話である。このヴァンサン・ダンディの「フランスの山人の歌による交響曲」は私も好きな曲で、大分以前にこの曲とオーベルニュの民謡のレコードを使ってコンサートを開いたことがあり、その時は尾崎喜八氏に解説をお願いしたことがあった。然しこのダンディの作品は他の曲を聞くに別山と関係が深いとはいえないと思う。「富士山」という表題からは連想されない内容があつて面白いが、これは同氏が有名になつて講演を依頼された時の文で特に若い時の思出ではないけれども氏独特のニュアンスがある。「思索の散歩道」では講演者として氏が地方に招かれた時の風土や態度とその心境が卒直に語られて居る興味深い。有名になると兎角偉らそうなる顔をしたが人の多い時代に飽くまで登山好きの詩人らしい面目がよく窺われて好感が持てる。「荒小屋」は戦災で東北の山麓に疎開された一年半の思出で罹災後の生活がよく語られて居る。又この章では特異な一文は「笛」である。これは荒小屋のあつ

た地方に令息(文中ではリオと名付けられて居る)が鉱物の研究に熱中し、顕微鏡に入れるプレパラートを作るといふ科学者に生長され、岩山に研究の為の小屋を自分の設計で建てたという、父君とは違つた方向に進まれた。従つて日常の会話などは乏しくなつたらしいが、近年になつて氏がその小屋を訪ずれた折に親子でその岩峯に登り、氏も昔取つた杵柄で立派な腕前を見せ父子共に心から喜んだといふ美しい話があり、氏の父親らしい心使いも知られて非常に興味深く読んだ。これを見て同氏は永遠の青年(心境は昔と変らない)という印象を受けた。この一文を見た令息はどんな感想を述べられるか聞きたいものである。うっかり書いて居る内に予定の頁数を超えてしまつたが、この章以外に、「自然手帖」「霧と星の歌」「古いケルン」(学生時代の記録)「誰か」「甦える記録」(学生時代の岳歴が判る)があり、愛読をお勧めして筆をおく。(瀬名貞利)

山岳第67年発刊

ながらくお待たせした一九七二年度の山岳67年が、漸く発刊のはこびとなり既に配本を終りました。但し七二年度の会費未納会員へはお送りできませんので、この際早急ににお払込み下さい。また今年四月以降入会された会員で入手ご希望の向きは二割引きでお頒けしますからルームでお求め下さい。

第68年(一九七三年度)の編集に既にとりかかっています。出来るだけ早く刊行を期しております。遅れる理由の多くが、原稿到着の遅延というところなので、目下依頼を受けられている会員におかれては、一日も早く原稿をお送り下さるよう、併せてお願いいたします。「山岳」編集委員会

小島鳥水 三氏生誕百年記念展

木暮理太郎 岡野金次郎

の準備について

近藤信行

今年は、日本山岳会の生みの親であり、育ての親である小島鳥水、木暮理太郎両氏の生誕百年にあたる。両氏とも明治六年十二月のお生まれで、未開拓の時代から日本の山々をのぼりつづけて、明治三十八年、日本山岳会創立以後は、会の運営と登山の啓蒙のためにつくされた。われわれ後輩のうけている恩顧はきわめて大きいものがあるとおもう。また岡野金次郎氏は明治七年四月のお生まれで、生誕百年というには、厳密には四カ月の差があるが、鳥水氏の同行者であったと同時に「ヴェオルター・ウェストンの発見」という、いわば本会成立の起動点をなした方であった。その生涯にわたって山を愛し、夜々営々と山にのぼりつづけておられたことは、鳥水、理太郎両氏とおなじである。

と私がその折衝にあたってきた。五月、六月の理事会において、この企ては報告され、承認を得た。そこで藤島敏男氏を委員長に、鳥水・理太郎・金次郎生誕百年記念（仮称）の準備委員会が発足することになった。六月二十八日、丸善側からも担当者が参加して全体委員会がひらかれ、期日、資料の展示品蒐集、会場設置、備品、記念展目録、出版物、ポスター、宣伝等々にわたって方策が検討された。その結果、第一の着手としてつぎの依頼状を関係各氏に発送した。

謹啓 時下益々清栄のこととお喜び申し上げます。日本山岳会は創立以来六十八年を数えるにいたりました。と同時に本年は本会の大先輩、小島鳥水、木暮理太郎、岡野金次郎三氏の生誕百年をむかえることになり、三氏の多大な業績を偲ぶとともに、近代登山の歩みと日本山岳会の歴史を江湖に紹介すべく記念展を計画してまいりました。幸い、丸善株式会社（東京・日本橋）より会場を提供して下さるという申し出がありまして、十二月二十三日より二十九日までの七日間、丸善三階画廊において三氏生誕百年記念展を開催する運びとなりました。本会ではさっそく委員会をひらいて、着々とその準備をすすめておりますが、つきましては貴家御所蔵品のうち、御出品いただけるものがございましたら、ぜひとも御協力賜りたく、左記の要領にて当委員会まで御返信いただけましたら幸甚と存じます。

〔展示内容〕 著作物、自筆原稿、筆蹟、書簡、絵画、写真、愛蔵書、初稿、図類、手紙、寄稿雑誌類、新聞、日本山岳会関係資料、その他。（三氏および初期山岳会会員にゆかりのあるものでしたら結構です）

〔御返信〕 御返信は同封の用紙に所要事項を御記入の上、八月十五日までにお送りいただけましたら幸甚と存じます。

記念展のための準備日程につきましては、当委員会からあらためて御通知申し上げます。御出品物につきましては、損傷盗難などのなきよう、重ね重ね慎重に取扱う所存でございますので、この記念展に御協力の際は、ぜひ御申し上げる次第であります。昭和四十八年七月 社団法人 日本山岳会

小島鳥水 生誕百年記念展
木暮理太郎 準備委員会
岡野金次郎 委員長 藤島敏男 委員

「この一本展」のお願い

恒例の年次晩餐会にあわせて行なっている「この一本展」も今年で十二回目になります。長らく主題を定めた著作による「この一本展」が続きましたが、今年は「この一本展」本来の形で、次の要領で催すことになりました。よろしくご協力くださいますようお願い申し上げます。

一、山に関する蔵書の中から珍本、秘本、稀本、署名本何でもこの一本と思われものを一冊持ち寄る。

二、「この一本」は年次晩餐会当日会場に持参、展示の上、会後持ち帰る。三、持参する「この一本」に関する随筆一篇（四百字原稿用紙二枚以内）を添える。

四、原稿には「この一本」の書名、著者名、発行所名、発行年月日とともに、随筆の題名と筆者名を記す。

五、原稿は十一月三日までに日本山岳会書宛送付のこと。

六、晩餐会の当日、出品目録と四項の原稿を取りまとめ印刷し参加者全員へ配布の予定。

今年も晩餐会を有意義にするためご協力下さい。 図書委員会

第十六回 もみじ会御案内

東海自然歩道と神寺泊
期日 十一月三・四日
会場 周智郡森町三倉 大日山金剛院
会費 二五〇〇円 募集 五〇名限
集合 三日午後一時迄 大井川鉄道家山駅
第一日の行程 家山（バス）市尾（徒歩約九〇分）大日山金剛院（入浴後懇親会）
第二日A班 金剛院（東海自然歩道を下る。約四時間）野守の池（家山）B班 金剛院（徒歩二時間）大井川内（バス三時間）掛川
C班 特別班、東海自然歩道予定線（道なし）を尾根通しに歩き、秋葉山まで歩く。途中野宿するかも知れない。二・三名限り。所要時間不明コース。
第一日の宿舎の大日山金剛院は、養老二年行基の開基であり、京都仁和寺の御室別院であり、古くは秋葉山の護摩所であった。現在、杉の太木に囲まれた山腰上の真宗の禪寺である。四ツ足動物を食するで大雨に見まわれるなど。当日は、寺の大黒が一生懸命調理してくれる精進料理と、ハンニヤトウを御馳走になる。

山奥の禪寺で山の大先輩の話を聞きまた、ハンニヤトウをたしなむのも下界では味わえぬゴクラクである。

注（一）フトン、貸切バス、食器等の都合で支部員を含め五〇名限り。直接、年令、会員番号、住所氏名を記入の上支部に申込みのこと。

（二）七〇才以上の会員に限り寺まで自家用車で送迎。

（三）翌日握めし用意する。動物質脂肪・蛋白ゼロの夕食のため、我慢出来ない方は、チーズ・バター類持参あれ。

静岡支部長 山本明三郎
（静岡市東鷹匠町五二の二四）

紅葉の蔵王に「きのこ」を喰う会開催案内

宮城蔵王の秋に何か行事をもつたら……という声をしばしば伺いましたので、宮城支部の連中が相談の結果、左記により開催することにしましたので多数御参加下さいますようご案内致します。蔵王温泉付近の紅葉も見頃と思われまじし、蔵王の古い湯につかり「きのこ」でも喰いながら歓談しようというわけですね。

記

主催 宮城支部

日時 昭和四十八年十月二七日(土)

日程 第一日(土) 一泊二日

集合 十二、三〇(貸切バス)―釜房ダム―川崎町、青根温泉―

蔵王温泉(二六、〇〇)

第二日(日)

蔵王温泉(八、〇〇) 徒歩―濁川遊行―かもしか温泉着(二〇、三〇) 入浴昼食―同発(二

三、〇〇)―賽の磧バス乗場(二、三〇)―ここで一応解散(仙台、白石方面定期バスの便あり)

募集人員 四〇〇名(先着順) 募集費 五、〇〇〇円(仙台―蔵王間

バス代、宿泊料、昼食代) 申込先 仙台市川内三の丸跡 仙台

市博物館、伊達篤郎宛 申込締切 十月十五日

服装 秋山ハイキング向(セーター、雨具を)

参加申込の方には詳細なスケジュー

ルをお送りします。なお、かもしか、

蔵王、青根など引続き宿泊ご希望の方

は事前にお知らせ下さい。

(宮城支部長 伊達篤郎)

会報原稿をお寄せ下さい

ガルツェン遺児援助資金について

ランタンリルンで、シェルバのガルツェン・ノルプが遭難してから十三年を経過し、この五月十一日には早くも十三回忌を迎えた。ガルツェン未亡人はインドのインフル等によりその生活がかなり窮迫している様子なので、ガルツェンとあつて行を共にした八隊(日本山岳会)の登山隊はそのうち四隊)の各隊長が発起人となって、去る四月以来、ガルツェン遺児援助資金の募金を行っていたが、短期間の募金であったにもかかわらず、十七万余円応募があった。この援助資金は去る五月、エレスト登頂二十周年記念のエレスト会議に出席された三田幸夫前会長によって、ダージリンのガルツェン未亡人に届けられた。この件につき、募金世話人の松田雄一氏より左のような報告があった。なお、この遺児援助資金はインド登山学校のもとに預金され、毎月一〇〇ルピーずつ育英資金として、援助されることになっている。

三田前会長はダージリンを訪問された機会に、ガルツェン・ノルプ未亡人宅を訪れ、ガルツェンに生前お世話になった各隊からの募金による、ガルツェン遺児援助資金六四八・四六USDルが届けられました。募金にご協力いただいた左記各隊関係者に重ねてお礼申し上げます。

記

第三次マナスル登山隊

ヒマルチュリ登山隊

雪男探検隊

同志社大アビ登山隊

二〇、〇〇〇円

デオ・ティバ婦人登山隊

四六、〇〇〇円

一五、〇〇〇円

二〇、〇〇〇円

二〇、〇〇〇円
二〇、〇〇〇円
一七六、〇〇〇円

ネパール王国政庁全焼

ネパール王国中央政庁のJindar Durbar は、去る七月九日、午前一時頃出火し、王国軍隊初め、警察官、消防官の献身的な努力にもかかわらず、その大部分を焼失した。政庁の重要文書は可能な限り搬出されたが伝えられる。この火災はカトマンズではかつて経験したことのない最大、最悪のものである。

ネパール国王はネパール国民に対し、政庁の再建に勇気を以て当るようにとメッセージを発表され、また国民の協力を確信すると述べられた(以上英字新聞より抄訳)

この火災によって、日本からのも含め、各国登山隊からネパール王国政府に提出されていた登山許可願も焼失した模様で、決裁されていなかったものは、再提出をすることになると思われる。

タクル、ネパール大使

離任

一九七〇年秋以来、駐日ネパール大使として勤務されていたタクル氏、この八月末日を以て任期を終え、帰国されることになった。タクル大使は日本山岳会初め、ネパールに赴く各登山隊の世話に尽くされ、会員諸氏にも馴染み深い外交官であり、日本山岳会エレスト登山隊の歓迎会その他の席にも顔を見せられている。またタクル大使は、来日以前にはネパール政府の儀典局長として、外国人の接待に当たっていたので、ネパールは、必ず〇年以前に訪れた日本登山隊は、一度は世話になっている。

タクル大使の送別会は、日本山岳会と日ネ協会の共催で九月七日、国際文化会館で行われ、本会からは会員十三名が参加、日高信六郎日ネ協会会長、三田幸夫本会前会長が敬送の挨拶をされた。

ネパール駐在日山大使も異動

ネパール駐在の根本博大使はこのたび帰任され、代わって小林春尚氏が駐ネパール日本国大使としてカトマンズに赴任されることになった。両氏の歓迎会はやはり本会と日ネ協会との共催で、九月二十四日に国際文化会館で行われ、本会からも代表者が出席した。

会務報告

六月理事会

(六月十一日本会ルーム)

出席者 中屋副会長、織内副会長、伊倉、宮下、近藤、松丸、神崎、堀山、今成、板倉、原、田村各理事。山崎、金坂各評議員。

報告事項

△年次晩餐会(伊倉)

本年度の年次晩餐会は十二月一日(土)ホテルニュージャパンで開催することに決めた。会費三千五百円。

△エレスト南壁の件(宮下)

エレスト南壁を目指す第二次R C隊を本会が推薦。

△評議員会は年三回理事会と別個に開きたい(山崎)

・日山協会の報告(山崎)

日山協会の本年度の役員等について報告

△委員会組織状況報告(各委員)

△議事

・会員の弔慰規定(伊倉)

通常は慶弔規定とするが、慶は考えずに弔慰の面だけを考える。現役員の

逝去については、本会として五千円か一万円の香奠または生花を贈り、理事が葬儀に参加する。旧役員についてもこれに準ずる。会員の逝去の場合は、会から弔電を打つ。これは通知があった場合にしか把握できないので、事務局で連絡があった場合処理する。承認・名誉会員を囲む会(織内)

提案の説明の後、承認、織内副会長が推進役となる。

・新旧役員懇談会(板倉、伊倉)

前会長、副会長に謝意をあらわす。提案者が推進することに決定。

・海外登山隊を本会が後援する場合の基準(宮下)

登山隊に事故が生じたり、登山を中止せられるような場合、本会の責任となるので慎重を要する。隊員全員が本会員であることが望ましいが、後援を得るための一時的会員の場合同様、後援した隊の隊員は、帰国後も本会のために寄与してもらいたい。選考委員を設けるという意見もあった。

・島水、理太郎・金次郎生誕百年記念展(近藤)

委員会を組織して推進する。承認

・ルム基金募金の件(板倉、伊倉)

・文書規定の件(伊倉)

・山岳研究所長の件(伊倉)

△意見交換

・団体加入の取扱い(板倉)

本会に団体加入を申しこんでくる団体、全く素性不明のような場合もあり、将来、上高地の山岳研究所利用なども考えて厳選する必要があるのではないか。申込みがあつてから、一、二年様子をみるということも考えねばならない。

・通常加入入会の取扱い(板倉)

団体加入でなく、通常加入の場合も、理事としては本人を全く知らない場合が多いから、第一推薦者である本人をよく知った人に責任をもってもら

いたい。

七月理事会

(六日午後六時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、中屋副会長、織内副会長、伊倉、板倉、春田、宮下、須田、浜口、堀山、今成、田村各理事。望月、佐藤、山崎各評議員(委任・近藤)。

▽報告事項

・委員会組織状況(板倉)
まだ二、三の委員会が未組織であるからすぐ組織をすること。

・現地支部長会議(伊倉)

第四回現地支部長会議の概略報告。これに対して、支部長会議は定款にないから、何らの決定も伴わない。今後は懇親会とした方がよいとの意見あり。

・信濃支部アンナブルナ隊、物故者の支部合同慰霊祭(織内)

七月七日松本で支部葬が行われるので織内副会長が参加。会長の弔辞を用意した。

・本暮祭、ウエストン祭終了報告(板倉)

・図書職員の新送迎会の件(板倉)
図書職員の新送迎に伴い、明七月七日ルームで図書委員中心に歓迎会を開く。

・映画会の件(堀山)

集會、青年懇談会、学生部共催で、七月九日(日)に日仏会館で山岳映画の会を開く。

・図書委員よりの報告(山崎)

鳥水・理太郎・金次郎生誕百年記念展そのほか。

・山岳の進行状況(望月)

▽議事
・理事会の開催日について(板倉)
毎月一回、第一金曜日に決定。
・理事会の記録送付について(板倉)
欠席の理事、評議員、支部長に議事

録抄を配布する。承認

・海外遠征登山隊の推薦の件(宮下)
一九七五年ブレンスーンに専修大学体育会山岳部及びOBのヒマルチュリ隊。承認

・山岳研究所募金の件(板倉)

建築資材の高騰、電気を入れる経費の予想外の価格などにより、当初予算の約三〇〇万円をオーバー。募金目標五〇〇万円の目標額はそのまま、目標達成一六〇%を期して努力する。「会報」に以上の事情を述べて、全会員に呼びかけ、また個人的にも未応募者の会員にも呼びかける。

・募金応募者の氏名、金額を会報に発表する件(春田)

応募者の好意に報いるためにも、公表すべきであり、また公表によってこれから応募する人の目安ともなつて、応募しやすくなるのではないかと。討論の結果、発表を承認。しかし前回のエペレスト募金の場合には強力な反対者もいたので慎重を期す。

・ルーム経費の件(伊倉)

新ルームの家賃が予算額を少し越え今後のことも考えて約七〇万円必要。現在、山岳研究所の募金中で、それに主力を注ぐため、ルームの募金は少し見送ることに決定。

△要望

・各委員へ依頼状を出して欲しい(田村)
必要場合は発行する。最近では依頼状を出していないが、その様式は残っている。要求のある委員会には発行する。

・会合の会費について(佐藤テル)
本会主催の催しの際に徴収する会費について、会員と会員外と区別したらどうだろうか。例えば支部の懇親会等において会員と非会員と全く同じである。この問題については今後検討を要する。

図書室便り (昭和48・7)

新刊図書受入報告

- 山と溪谷社寄贈
- (1) 山と溪谷社編 山溪カラーデラック
ス「日本アルプス」昭和48
- 創文社寄贈
- (1) 串田孫一・山口耀久編「山と文学」
昭和48
- じゃこめてい出版寄贈
- (1) 串田孫一著「旅の絵本」昭和48
- 京極 實氏寄贈
- (1) 京極 實著「尾瀬の旅と地名」昭和48
- 日本経済新聞社寄贈
- (1) 今西錦司著「そこに山がある」昭和48

定期刊行物受入報告

- 〔部報・会報類〕
- (1) 兵庫県山岳連盟「兵庫山岳」No. 74 (48-7)
- (2) ここの山岳会「月報」No. 143 (48-7)
- (3) 日本地図資料協会「古地図研究」No. 41 (48-7)
- (4) 国立公園協会「国立公園」No. 283 (48-6)
- (5) 京都山岳会「京都山岳」No. 579 (48-7)
- (6) 東京管林局広報室「みどり」No. 12 (48-6)
- (7) 奥多摩山岳会「O・M・Cレポート」No. 284 (48-7)
- (8) 長野県山岳協会「山岳協会ニター」No. 30 (48-7)
- (9) 日本自然保護協会「自然保護」No. 132 (48-5)
- (10) 低山を歩く会「低山」No. 97 (48-7)
- (11) 神奈川県山岳連盟「とろろ木」No. 36 (48-7)

12 日本山岳協会『登山月報』No. 51 (48-7)

〔雑誌〕

- (1) 『アルプ』No. 185 (48-7)
- (2) 『アピ』No. 5 (48-8)
- (3) 『地図』No. 42 (48-7)
- (4) 『岳人』No. 314 (48-8)
- (5) 『岩と雪』No. 32 (48-8)
- (6) 『山と溪谷』No. 419 (48-8)
- (7) 『創文』No. 119 (48-7)

〔その他〕

- (1) 本荘山の会「キナバル登山報告書」72年12月の記録
- (2) 長野県山岳総合センター「夏山の踏本研究」73年3月
- (3) 京都市中体連ワンダーフォーゲル委員会「活動記録72年4月～73年3月」No. 11

〔新着海外雑誌〕

- 1) 『Alpinismus』73-6
- 2) 『Appalachia Bulletin』Vol. 39, No. 6, May '73
- 3) 『Der Bergsteiger』40. Jah. 5/73
- 4) 『The Canadian Alpine Journal』Vol. 56 '73
- 5) 『Deutscher Alpenverein』25. Jah. Heft 3. mai/Juni '73
- 6) 『Federacion Española de Montañismo』72
- 7) 『The Geographical Journal』Vol. 139, Part 1 Feb. '73
- 8) 『Mountain』No. 27 May '73
- 9) 『Rivista Mensile』Anno 94, N. 1 Gennaio '73
- 10) 『Sierra Club』Vol. 58, No. 4, April '73, No. 5, May '73

〔洋書受入報告〕

- 1) Dr. A. Gubler 寄贈
Club Alpin Suisse "Cabanes"

ルーム日誌 (48年7月)

- 2日(月) 集會委員会
- 4日(水) 山岳と山日記広告打合せ
- 5日(木) 中山山岳部OB会
- 6日(金) 稲門山岳会
- 7日(土) 中山山岳部OB会
- 7日(土) 周布・影山事務職員歓送会
- 9日(月) 中山山岳部OB会
- 10日(火) 学生部女子部
- 12日(木) 中山山岳部OB会
- 13日(金) 青年・学生懇談会
- 14日(土) 学生部委員会
- 16日(月) アンケート委員会
- 18日(水) 書評委員会
- 19日(木) 明治大学山岳部OB会
- 20日(金) 第二九八回小集會「アンナブルナ報告会」信濃支部講師 松永敏郎
- 21日(土) ビールパーティ
- 23日(月) アンケート委員会
- 25日(水) 鳥水・理太郎展準備委員会
- 27日(金) 青年・学生懇談会
- 28日(土) 常務理事会・山研委員会 同会議
- 31日(火) 海外連絡委員会 七月中来室者 五九九名
- 会員異動
- 代表者変更
- 六七五二 女子登攀クラブ代表 久野英子
- 七〇〇六 第二次RCC代表 湯浅道男
- 退会 (48年7月)
- 三二七五 澄川 昭二
- 四二一八 野田 嘉文
- 五二八一 海老沼 清
- 物故会員
- 七二六〇 山本憲二 昭和四八・七・

上高地山岳研究所募金 及びクラブルーム移転 募金について

上高地山岳研究所はいよいよ開所の段階を迎えますが、諸物価の高騰、それに加えて電線埋設に予想外の経費を要し、当初の募金目標五百万円では到底、充足できないことになりました。従って当初目標の百五十パーセントぐらいに目標を更新し、皆様の再度の御協力をお願い致す次第です。現在まだ当初目標額にすら達しておりませんので、たびたびのお願いで恐縮ですが、御意志のある方でもまだ申込まれない会員諸兄姉に至急お申しこみを重ねてお願いします。

なお、今までに応募された方々につきましては、その御好意に報いるために、会報紙面に近く、その芳名、金額を掲載致します。エベレストの募金や、向井ビルに移転の折の募金もその都度、御芳名応募金額を明示して謝意を表わして参りましたが、会員の中には、氏名はともかく金額はむしろ発表しない方がよいという御意見の方もあり、一方において金額が公表されれば、これからの応募の目安ともなるという御意見もあり、特にこの件に関し、御希望のある方は連絡をお願いします。

また上高地山研は利用しないがルームはいつも利用するからルーム移転費なら寄附するという会員もありますので、その方への御援助でも結構です。なお山下一夫氏の御遺族よりルーム移転費として一万円寄附をいただき、また足立源一郎、山下一夫両氏を偲ぶ会の残金約五千円もルーム移転費にくり入れさせていただきました。

(11)

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・葦山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B 5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

山日記1973年版

日本山岳会編

〈A 6判344頁〉定価850円

山 岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
総索引	1,000円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

いろいろばた

南会津山の会

〈B 24判判320頁〉定価1,900円

シプトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A 5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

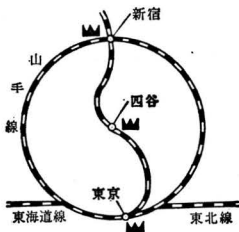
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですかり
として登山ですかり
どうしても必要なもの
をこしらえてやる
ま責任はもっています

おたるぐンティ
でんや 28128456
中央区八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

